機関誌

ディベート

★日本人の論理的表現力を高めるために★

特集・国会議員のディベート力

日本ディベート研究協会「ディベート大学」
責任編集　北岡俊明

はじめに

本論文集は、自民党と民主党の国会議員のディベート（議論・討論・論争）技術について、理論と実践の両面から論じたものである。

理論編では、予算委員会における、自民党の国会議員のディベート技術の問題点を指摘し、同時に、改良・改善点も述べた。

実践編では、実際の討論の場面を想定し、ディベートの実践的な技術を伝授した。国会議員は、ぜひとも、勉強していただきたい。日本国のデモクラシーのために。

■政治家の粗末なディベート力

筆者は、以前から、予算委員会や党首討論おける国会議員のディベート技術について研究してきた。小泉純一郎、安倍晋三、福田康夫などの元総理のディベート技術について、著書にも書いた。

しかし、今回は、自民党が野党となってはじめての討論の分析であった。今までは、与党として、野党の質問を受けて立つ立場だった。野党に転落し、一転して、攻守ところを変えた。質問する側に回った自民党議員のディベート技術はどうなのか。

一言でいうと、自民党議員のディベート技術はお粗末である。理由は、第一はディベートの教育訓練を受けていないこと、第二は実践の場を経験していないこと、これにつきる。お粗末なディベート技術をみて、政治家として、いったい今まで何をしていたのかと、納税者として厳重注意をしたくなった。

■一に討論、二に討論、三四がなくて、五に討論

政治とは、一に討論、二に討論、三四がなくて、五に討論である。デモクラシーとディベート（議論・討論・論争）は同義語である。表裏一体である。ディベートができない政治家は政治家失格である。

今まで、自民党は、ディベート力を磨かなくても権力の座に安住することができた。しかし、その勉強不足のツケが回ってきた。その間、民主党はディベート力を磨き、予算委員会で、獅子奮迅の戦いを仕掛けてきた。長妻議員などはディベート力で有名になった。

今度は自民党である。権力に安住してきた分、勉強不足は深刻である。相当な覚悟をして、一からディベートの能力や技術の習得に努力しなければならない。

谷垣総裁の第１回・２月１７日の党首討論はお粗末だった。しかし、３月３１日の第２回の党首討論は、だいぶ良くなった。必死さが画面から伝わってきた。もちろん、まだまだ未熟である。しかし、あの必死さで勉強するならば、技術の向上は早く、期待を持てる。

■若手議員を徹底的に鍛えるべし

若手議員は、一からディベート技術を学習しなおすことだ。元総理小泉純一郎の息

子、進次郎議員などの若手を、派手な政治パフォーマンスに引っ張りだすのではなく、じっくりとディベート技術の基礎から勉強をさせるべきである。

なぜならば、小泉進次郎議員といっても、企業でいえば、ケツの青い新入社員レベルである。雑巾がけの時である。小泉進次郎議員をひっぱりだすほど、自民党は人材が枯渇しているのか。国民を舐めたらアカンと警告しておく。こんなことをしていると、政権奪取は遠のくだけである。

筆者は、３０年以上、人材教育に携わってきた。若手は鍛えれば鍛えるほど能力がのびる。進次郎議員などは、私の主宰する「ディベート大学」に参加して、日本を代表する一流ディベーターの胸を借りて、切磋琢磨すれば、将来が楽しみである。

■いくつになっても師は必要である

日本では、若くして有名になると、マスコミがチヤホヤして潰してしまう。鉄は熱いうち打てという。人間は、鍛えるべき時期がある。それを逃すと、能力は進化するどころか、退化する恐れがある。

人が人生を送るにあたって、コーチというのか、監督というのか、教えてくれる「師匠」が絶対に必要である。これは５０歳になっても、６０歳になっても、７０歳になっても、いくつになっても、師とあおぐ人は必要である。

師とあおぐ人をもっている人は、才能に限界はない。いくつになっても伸びる。筆者は教える立場であるが、同時に、教えられる立場でもある。師とあおぐ人はたくさんいる。師とあおぐ人の前にでると、人間は謙虚になる。生涯現役というが、いくつになっても、学ぶ意欲が湧いてくる。

人皆我が師である。筆者には師とあおぐ人、そして、切磋琢磨する同志がいる。本書は、師からの教え、同志からの教えで、完成した。深く感謝したい。

本特集号が、政治家のディベート力の向上、すなわちデモクラシーのために役立つことを心から願っております。本書が完成できたのは、多くの同志会員のお陰であります。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。

平成２２年４月６日

日本ディベート研究協会・日本戦略研究協会代表　北岡俊明

■実践編・執筆者

実践編の執筆陣は、ディベート大学＆戦略大学の研究員＆主任研究員である。各研究員は、ディベート＆戦略研究の専門家である。以下に名前を記し功績を讃えたい。

青木　恒　　長谷川賢二　　押田信昭　　竹内勇人
正木　隆　　塚越幹夫　　江原　裕　　金井健司
小出大和　　柳澤賢治　　宇野英明　　黒崎　浩　　辻 俊昭

目　次

■分析編
自民党議員のディベートに致命的な欠陥あり（北岡俊明）・・・・・・・・・・・・・・4
・自民党議員の拙劣きわまりないディベート技術
・ディベート技術を向上させる方法
・演技力を磨け
・ディベート力の育成が緊急の課題である
・正しいディベートを学べ
・議論の原理原則
・ディベートは知識生産技術である
・国会委員会の部屋の構造を改善せよ。

■実践編・ディベートの技術
甘ったれたボンボン総理が日本を滅ぼす（青木恒）・・・・・・・・・・・・・・・・32

鳩山内閣を追い詰めるディベート技術（長谷川賢二）・・・・・・・・・・・・・・・40

尋問型ディベート・事例・経済政策編（押田信昭）・・・・・・・・・・・・・・・・45

民主党の経済無策を追求する（竹内勇人）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

国益をそこなう最悪の内閣を蹴落とせ（正木隆）・・・・・・・・・・・・・・・・・51

鳩山政権・予算委員会代表質問事例（塚越幹夫）・・・・・・・・・・・・・・・・・58

谷垣自民党総裁に望む三つの質問力（江原裕）・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

子供手当ては外国人に払うべきではない（金井健司）・・・・・・・・・・・・・・・66

安全保障に関する質問事例（小出大和）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67

鳩山政権への尋問事例（柳澤賢治）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70

民主党マニフェストに戦略なし（宇野英明）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74

郵政改革法案は郵政「改悪」法案である（黒崎　浩）・・・・・・・・・・・・・・・76

予算委員会型ディベート想定質問（辻俊昭）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
★（注）あとがき・著作物・略歴は、８２頁以降を参照のこと。